

日付:2015年5月31日／聖書:使徒言行録28:17～31

主題:「福音宣教の自由」

使徒言行録は、見える形で聖霊の業が記されている。この書に触れる私たちは、どうこの世において、見えない聖霊の業とし感じ取っていくか、理解していくかが問われている。たとえば、使徒言行録2章に記されている聖霊降臨の出来事は、いきなり躓きかねない、信じがたい出来事が記されている。「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」という神秘的な出来事。これは要するに、教会の広がり先取りがここに記されていると思う。このエルサレムにのみ、神の救いがあると信じていたユダヤ人に対して、神の救いは、ほかの国々に末広がっていくんだということの先取りがここに記されているということではないだろうか。

さて、パウロが聖霊の迫りを受けてエフェソからエルサレムに向かう。エルサレムでどんなに苦難が待ち構えているのか分かっていても、パウロの仲間がどんなに止めようとしても、パウロ自身、聖霊の迫りを受けて向かうのである。しかし、やはりパウロは捕らえられてしまう。ただそのことが幸いして、パウロを殺そうとするユダヤ人の陰謀から逃れることが出来た。そして、ローマに護送されるのだが、パウロには、他の囚人とは比べ物にならないほどに自由な生活が許されていた。一軒の家を借り、入り口には番兵が付き、訪問者は自由に出入りが出来て、福音宣教が自由に語られていったのである。パウロがエルサレムへ行く思いが迫られたのは、結局、こういう形で、ローマにて福音宣教が成されて行くという神のご計画があったということ。“全ての道はローマに通ず”という言葉があるように、当時のローマは世界の中心地。そこで語られたことが世界中に広がっていききっかけになった。人間を縛り上げ、不自由に虐げることは出来ても、神の言葉、福音宣教は、全く自由に何の妨げもなく、宣べ伝えられていく。

最後に私たち普天間教会に与えられた福音宣教の大きな課題の一つとして、先週の総会にて決議された。2012年10月から行っている「普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会」を今回正式に教会の業として担うことになった。特にこれまでと変わることはないが、キリストの平和の一助を担わせて頂くという思いでゴスペルを通して、基地はいらないということを発信していく。私たちの教会に与えられた福音宣教の自由を、勇気をもって発信していきたい。(神谷)